



# 空中回廊

第4号

A I C H I  
P R E F E C T U R A L  
M U S E U M  
O F A R T

愛知県美術館友の会 会報

私のこの1点  
所蔵作品から

美術館のページ  
1997年度の企画展

1  
2  
3  
4

私の行った美術館  
瀬戸市歴史民族資料館

事務局から

 AICHI ARTS CENTER

## 私のこの1点

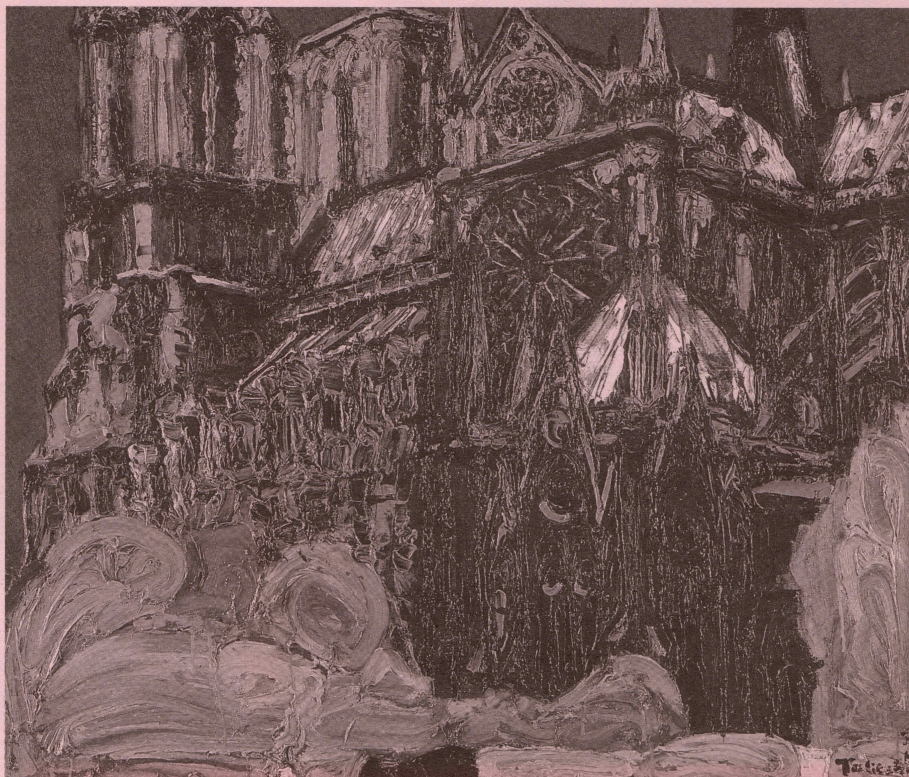
愛知県美術館の所蔵作品から

愛知県美術館の所蔵作品のなかから、会員の皆さんに「私のこの1点」というテーマで、好きな作品、気になる作品を取り上げ、ご紹介いただきます。

### 林 武 《ノートルダム》

杉浦 節子

林 武 (1896-1975)  
《ノートルダム》1961年  
90.9×116.5cm



私は阪神大震災で家を失い怪我をして当地へまいりました。病院で後遺症と心の病に悩まされ、そんな或る日、美術館へ足を運びました。入口付近で素晴らしい彫刻が迎えてくれました。所蔵作品を見てゆくうちに私の心を強く捉える作品に出会うことができました。

今までに何度もフランスのノートルダム寺院を訪れ、ゴシック建築の偉大さに圧倒されたのですが、今日は全く別のノートルダムです。画面いっぱいに配された石造建築は、筆にたっぷりと含ませたブラックとイエローの絵具で、厚く盛り上げるように描出され、そびえたつ垂直性が強調されています。一体どんな太い筆、どんな大きなチューブだろう。前景の森もダークグリーンを主体に水平性を基調とした、ダイナミックなタッチです。この強烈な色彩や筆遣いだけではなく、独特の画面構成と気迫に魅せられてしまいました。見ているうちに私の心が大きく動き始めるのに気付いたのです。やっぱり生きていてよかった、強くなろう、そんな深い感銘を受けた作品でした。

## エドワード・ジョン・ポインター 《世界の若かりし頃》

平野 孝雄

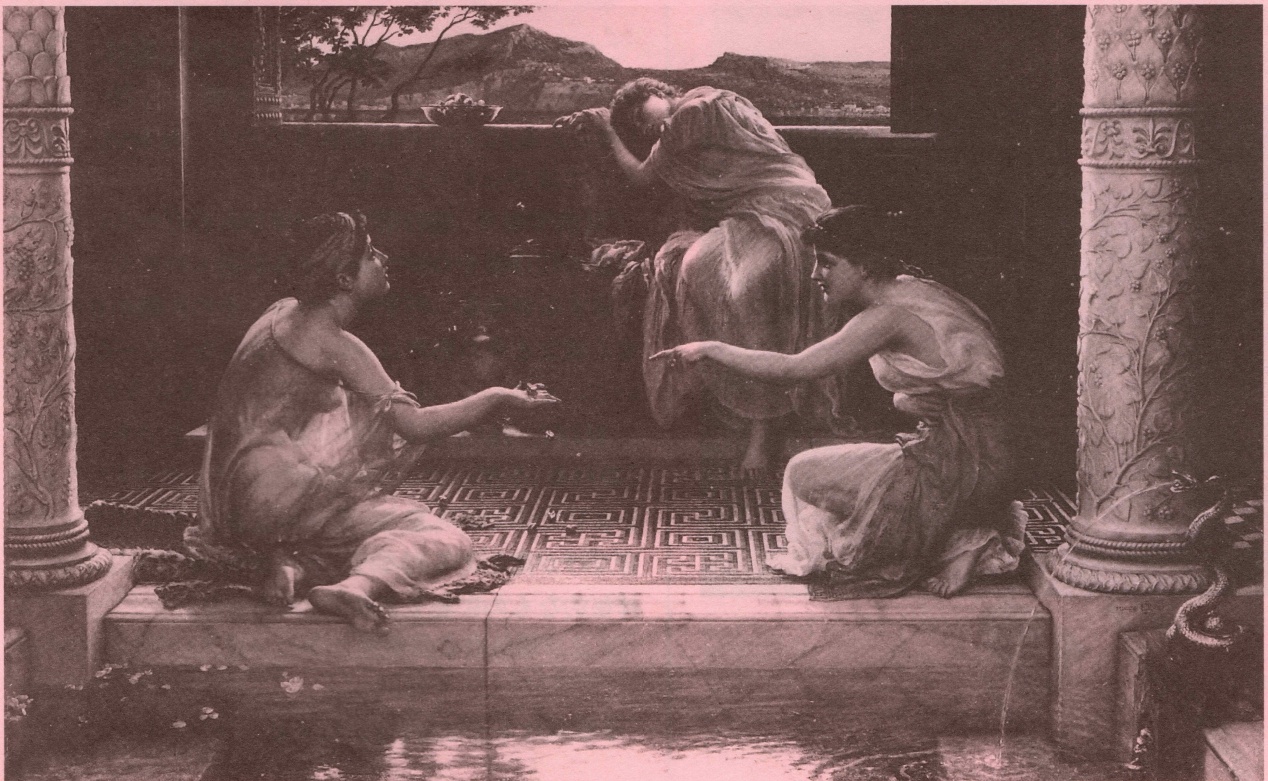
随分以前からこの絵にひかれていた。優美な女性像・豊かで安らぎのある背景そして水辺…。こういった雰囲気、当時仕事で疲れていた私の心をいやしてくれた。県美へ立ち寄るとこの絵の前でしばし立ちつくした。

作者エドワード・ジョン・ポインター(1836-1919)は建築家の父と彫刻家の孫にあたる母との間にパリで生まれたイギリスの画家。17歳で画家を志しロンドンで絵を学び、21歳の時フランス新古典主義の巨匠アングル（注）の追随者の一人シャルル・グレースのアトリエでトレーニングを積んでポインターの絵がほぼ確立。画業に集中していた1880年代～1893年頃の作品の一枚がこの《世界の若かりし頃》(1891年)と思われ、ヴィクトリア女王時代のイギリス政治経済の繁栄がこ

の絵の背景にあったのかなと思ったりする。

ポインターは1894年にロンドン・ナショナル・ギャラリーの館長になり、また1896年ロイヤル・アカデミー院長となって多くの功績を残した。教育と美術行政の両実績が高く評価されて死後セント・ポール大聖堂に埋葬された。

同時代のイギリスではロセッティやミレイが、フランスではセザンヌやモネたちが活躍していた。もし館長、院長職につかずに画家として絵を描くことに専念したなら、どんな西洋美術史上での足跡を残してくれたか、「画家」ポインターの練達と変身は私の想像の世界だけの楽しみとなってしまふ。



エドワード・ジョン・ポインター (1836-1919) 《世界の若かりし頃》1891年 76.2×120.6cm

## 須田 国太郎

### 《夏》

中野 ともみ

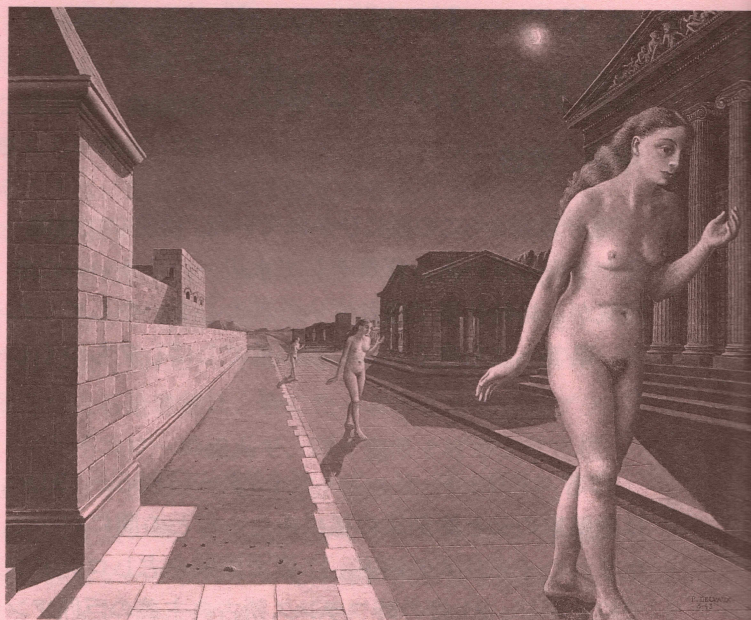
夏の絵といえば、原色で描かれた、明るくて、はっきりした騒がしそうな絵を思い描いていました。そのためこの絵を見た時は、これが夏の絵なのかと思いました。枯れているかのような草、屋根のくずれそうな家々、また動物が描かれていなくてしんとした風景なのです。また全体の色調からして、暑いというより暖かいという感じがしました。

でもじっくり観ていると、草々は枯れているのではなく、太陽の照り返しでオレンジ色に光っているのであり、なんだか蝉の音が聞こえてきそうになってきました。

この作品は50年以上前につくられたものなので、その頃にはこのような風景をいたる所で見かけることができたかもしれませんが、私には、心の中の懐かしく感じる田舎の風景のように思われます。そしてこの絵を見るといつも、こんな所で一夏を過ごしてみたいなあと思うのです。



須田 国太郎(1891-1961)  
《夏》1941年  
90.9×116.7cm



## ポール・デルヴォー

### 《こだま》

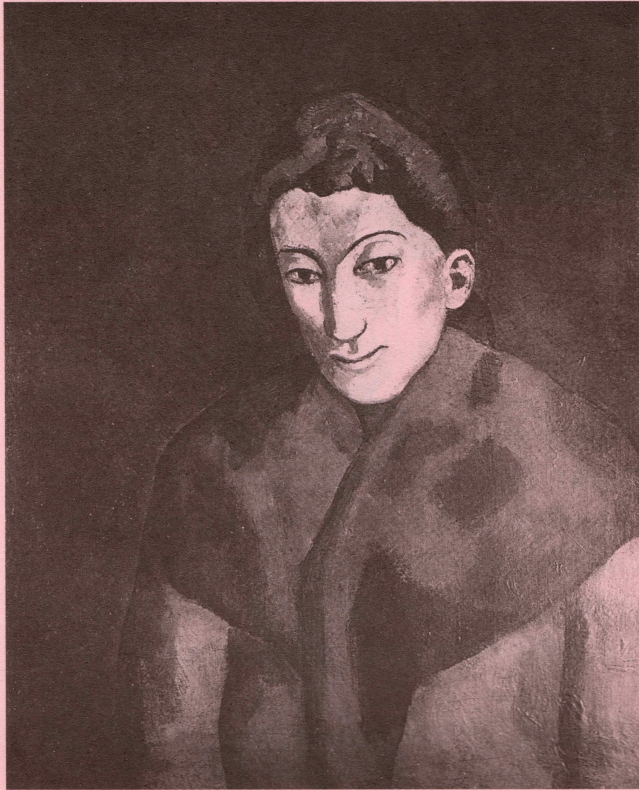
ポール・デルヴォー  
(1897-1994)  
《こだま》1943年  
105.0×128.0cm

森 健次

この絵をひとことで形容するとしたら、私は、「静けさが聞こえてきそう」という表現を使う。「静けさ」が「聞こえる」というのは形容矛盾かもしれないが、表現としてはぴったりだと思う。

見渡す限り、地の果てまで伸びる石だたみの道。その傍らには歴史ロマンをそそる石造りの宮殿。それをうっすらと照らし出す月明かり。その月明かりの中を歩く裸女とその影のほかには人の姿はなくシーンとしている。まさしく「静けさ」が聞こえてきそうだ。

私はこの絵を見るといつも、こんなところへ行って「静けさ」を聞いてみたいと思う。そしてまた、この道を歩いてみたいと思う。自分の足音と、そのこだまする音だけが聞こえるだろう。その音が、静けさをいっそう神秘的なものに感じさせてくれそうだ。



## パブロ・ピカソ 《青い肩かけの女》

パブロ・ピカソ (1881-1973)  
《青い肩かけの女》1902年  
60.3×52.4cm

岩塚 多嘉子

ピカソといえばあのキュビズムのピカソという作品しか頭になかった私は、何時の頃か、「青の時代」(20～23歳)といわれる時期があり、若い時は正統写実を描いていたと知った時は、大変な驚きでした。どなたもかと思います。

《青い肩かけの女》は単一の色調の中にも、濃淡があって画面全体は大変複雑に思えます。また、深味のある人間性をたたえた顔の表情に私は打たれます。20歳そこそこの青年がよくぞ描くものだとも。やはりピカソは天才。スペインの神童といわれたピカソがその生涯に於いて残した多く独創的な作品群にしてしかりです。

展示室の中で《青い肩かけの女》はひととき異彩を放っています。

## 北川民次展から

### 《瀬戸風景》

常川 雄次郎

今回の北川民次展は、作品の質量ともに豊富で見ごたえのある展覧会であった。その中でもこの一点といえば《瀬戸風景》である。やわらかな色彩で肩に力をいれずに戦争の終わったあとの瀬戸の春の景色が描かれている。菜の花、子供達、ほっとした気分がよく表現されていて私は好きだ。

この絵の描かれた1950年頃、私は高校生で瀬戸から通学する友人も多かった。民次の壁画の仕事に協力したE.K君、彼は民次のアトリエを守るために頑張っている。また先日NHKテレビで放映された“チョモラリ”と言う7千メートル級の高山に63歳で登頂に成功したY.K君も瀬戸の仲間だった。彼はテレビの画面の中で高校時代と同じ笑顔で写っていた。



北川 民次 (1894-1989)  
《瀬戸風景》1950年 61.0×91.0cm  
瀬戸信用金庫 蔵

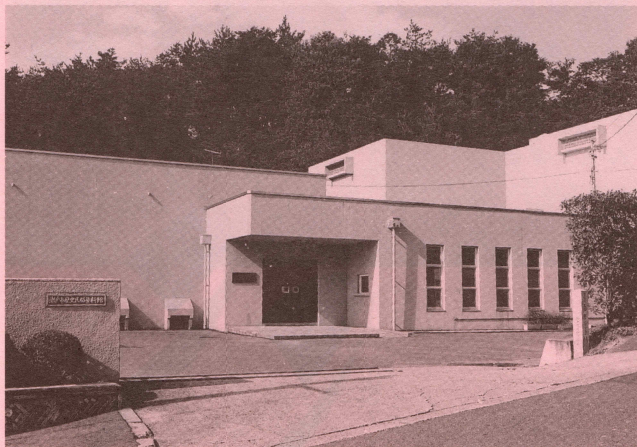


私の行った美術館

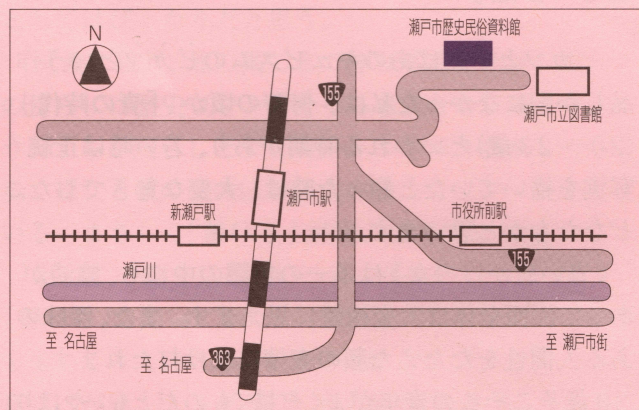
瀬戸市民俗資料館

## 新井 昭二

瀬戸市歴史民俗資料館は昭和53年10月に開館。土地柄、陶磁器生産の手作業に使われた民具、瀬戸焼の変遷を示す数々の製品が主体となっています。中には戦時中に試作された陶器の貨幣もあります。その中で私が一番印象に残っているのが磁製の大燈籠です。明治前期、瀬戸ではかなり大型の製品が多く作られました。この燈籠は高さ1m90cm程、呉須を主とした絵柄、細かい細工等、当時のすばらしい技術に圧倒されます。一説によれば、明治11年のパリ万博に出品されたものともいわれます。同じ品は長野の善光寺にも奉納されており、山門を入り、本堂を正面にみる参道の途中、左右一対の金網で覆われた大燈籠がそれです。いずれも加藤左衛門(二代目)の手になるもので、染付銘も読むことができます。この左衛門窯は江戸後期から明治にかけて瀬戸有数のメーカーで、ドイツの硝子メーカーが我社に匹敵する技術と賞讃した話も聞いています。いずれにしても一見の価値あるものと思われれます。



二代加藤左衛門 染付花唐文大燈籠 明治前期(瀬戸市指定有形文化財)



■名鉄瀬戸線・新瀬戸駅より北東へ徒歩5分 ■愛知環状鉄道・瀬戸市駅より北東へ徒歩5分

開館時間：午前9時～午後4時30分(休館日：月曜日・祝祭日)

入館料：大人100円(20名以上の団体は80円)

(中学生以下・65歳以上・妊婦・身障者手帳受給者は無料)

所在地：〒489 愛知県瀬戸市東松山町1番地

TEL0561-82-0687 FAX0561-85-2653

## 美術館のページ

### 愛知県美術館

#### 1997(平成9)年度の企画展

開館5年目を迎え、愛知県美術館はますます充実した企画展を皆さんにご覧いただけるよう努力しています。今年の企画展は、ピエール・ボナールやウィリアム・モリスのような海外作家、あるいは北脇昇や川合玉堂のような日本の作家を取り上げる展覧会だけでなく、「20世紀美術の冒険」のように海外の著名な美術館の所蔵品を紹介するもの、「イタリア美術 1945-1995」のようにある国の戦後の美術動向を概観する展覧会と盛りだくさんです。

そして特に美術館開館5周年の本年度企画展のなかで注目していただきたい展覧会は、「近代美術の100年」です。この展覧会は、愛知県美術館のコレクションから精選して10階の展示室全室を会場に開催します。新しい美術館のために収集を始めて10年、開館して5年という節目を迎えて、愛知県美術館コレクションの精華をご覧いただくとするものです。さらに、この展覧会は、全展示室を使う大展覧会でありながら、入場料は普段の所蔵作品展と同じ料金設定を予定しています。一般500円、高校・大学生300円、小・中学生無料ですから家族連れなどでの大勢のご来館をお待ちしております。

企画普及課主任学芸員  
高橋秀治



ピエール・ボナール  
《レーヌ・ナタンソンと  
赤いセーターの  
マルト・ボナール》  
1928年  
パリ国立近代美術館蔵

#### 企画展 開館5周年記念

##### ■没後50年 ボナール展

3月28日(金) - 5月18日(日)

家庭的で親しみあふれる作品で知られる  
ピエール・ボナール (1867 - 1947)。

初期から晩年までの油彩画を中心とする約80点の作品により彼の芸術を紹介する、わが国では30年ぶりの本格的な回顧展です。

●併催 コラボレーション 岡本敦生・野田裕示展

##### ■理智と幻想のシュルレアリスト 北脇 昇展

5月30日(金) - 7月13日(日)

名古屋出身の北脇昇 (1901 - 1951) は、日本のシュルレアリスム(超現実主義) 絵画における最も重要な画家の一人です。

東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、愛知県美術館の共同企画による初めての回顧展です。

●併催 アンドリュウ・ワイエスの世界 I

##### ■モダン・デザインの父 ウィリアム・モリス展

7月25日(金) - 8月31日(日)

20世紀のデザイン界に決定的な影響を与えたウィリアム・モリス (1834 - 1896)。没後100年を記念してヴィクトリア&アルバート美術館で開催された回顧展の出品作を中心に、モリス芸術の全貌を紹介します。

●併催 加納光於のオブジェ展

##### ■20世紀美術の冒険 -セザンヌ、ファン・ゴッホから現在まで- アムステルダム市立美術館コレクション展

9月12日(金) - 11月3日(月・祝)

アムステルダム市立美術館は近・現代美術のコレクションで世界的に知られています。ポスト印象派から戦後に至るまでの美術の流れをセザンヌ、ファン・ゴッホ、ピカソ、シャガール等の66点の作品によってたどります。

##### ■イタリア美術 1945-1995 -見えるものと見えないもの-

11月14日(金) - 1998年1月15日(木・祝)

1960年代末から70年代にかけて登場した絵画運動アルテ・ポーヴェラを中心に、1945年以降現在に至るイタリア美術の展開をクネリス、メルツ、ファプロをはじめとする26作家の約80点の作品で紹介いたします。

●併催 アンドリュウ・ワイエスの世界 II

##### ■近代美術の100年 -愛知県美術館コレクションの精華-

1月30日(金) - 3月8日(日)

愛知県美術館では国内外の20世紀の美術を系統的に紹介すべく、収集活動を続けています。開館5周年を迎え、これまで収蔵された作品により20世紀美術の展開をたどります。

##### ■川合玉堂展

3月20日(金) - 5月5日(火・祝)

愛知県の木曾川町に生まれた川合玉堂 (1873 - 1957) は、水墨と色彩の融和した情趣あふれる近代的な風景画を生み出しました。

代表作を含む約120点によって60余年にわたる彼の画業を紹介いたします。[一部展示替えがあります]

●新年度の会員の募集が始まりました。会員の皆様には、引き続きご参加いただくことを、そして、一人でも多く新しい方にもご参加いただき、活動の輪を広げていきたいと願っています。

●美術館ではインターネットでさまざまな情報提供を始めました。友の会の情報もご覧いただけます。今後は、友の会の情報を充実していきたいと考えています。どうぞご利用ください。

愛知県美術館のホームページ

<http://www.pref.aichi.jp/art/museum.html>

### 編集後記

「カンディンスキー&ミュンター」展の鑑賞会も、たくさんの会員の参加がありました。館長、副館長はじめ学芸員の方々の楽しい解説で、やはり友の会の鑑賞会は素晴らしいと誰もが思ったことでした。12月の北川民次展鑑賞会の時には、鑑賞会后久しぶりの懇親会を開きましたが、約70名の参加者で大いに盛り上がりました。この懇親会も会員と事務局で役割分担し、料理や飲み物を作ったり仕入れたり準備もなかなか楽しくできました。初めての方ともお話しすることができた。次回の会を期待する声が聞かれています。

この『空中回廊』の編集も、先号から友の会会員と事務局との編集になり、内容体裁も皆の意見で決めています。〈私のこの一点〉その他の原稿やご意見を会員の皆さまがお寄せくださることを期待しております。

4月から友の会も新年度になります。お友達お知り合いを是非お誘いください。(宮崎)

もっと楽しい会報に!

ご感想ご意見をお寄せください。

### 編集

会 員：宮崎玲子

天野明 北川昌子 白尾淑子 杉山博之 中島敬子

事務局：村田真宏 横井希世衣

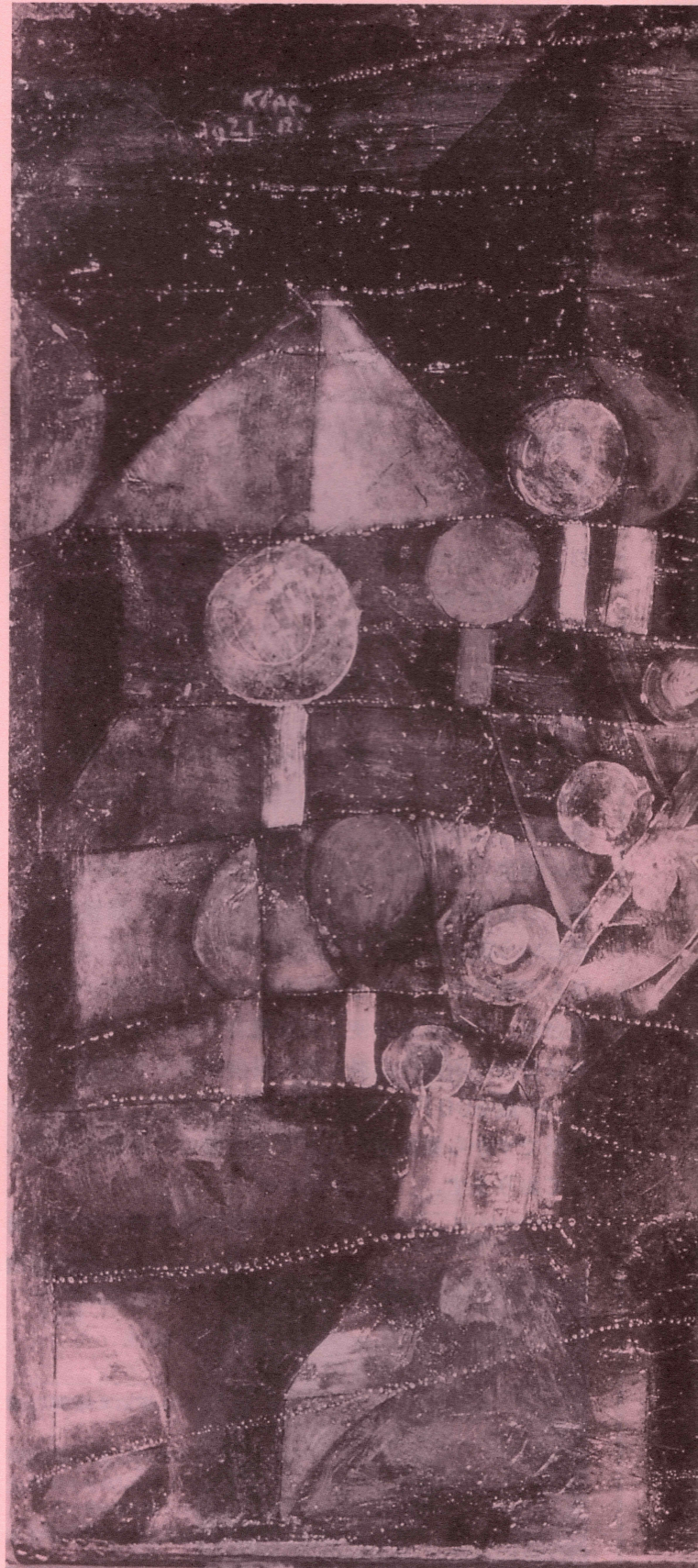
発 行：1997年3月

愛知県美術館友の会

〒461名古屋市中区東桜1-13-2

TEL 052-971-5511(代)

デザイン・レイアウト：小谷恭二



パウル・クレー (1879-1940)

《女の館》1921年

41.7×52.3cm